

交換メカニズムをめぐる考古学研究の行方

常木 晃

Retrospect on the Archaeological Studies of Exchange Mechanisms

Akira TSUNEKI

遺物が流通するメカニズムの追究は、考古学研究に様々な可能性を与えてきた。遺物の広がりや流通する様態を一般化しそれを比較することによって、交換を視点として人間社会の進化や変遷が論じられてきたのである。ところがその理論的主柱であった経済人類学の地盤沈下とともに、1990年代以降考古学における交換メカニズム研究の衰退が甚だしい。この小論では、交換メカニズムをめぐるこうした研究史を回顧するとともに、社会の複雑化の過程や社会システムの変遷を語るために新たな交換メカニズム研究が必要であることを主張する。

キーワード：交換メカニズム、遺物の流通、経済人類学、社会統合形態、交易モデル

The evolution and transformation of human society has been discussed from the viewpoint of exchange, based on the generalization of exchange modes working in each society. However, economic anthropology, which provided the theoretical background for these studies, is on the decline, and the archaeological studies on exchange mechanisms are declining in power. In this article the author reviews the study history of exchange mechanisms and asserts that new approaches on the exchange mechanisms must be established for the processual study of social complexity and transformation of social organization.

Key-words : exchange mechanisms, material distributions, economic anthropology, forms of social organization, mode of trade.

はじめに

人間の社会が様々なレベルで財や情報の交換を行うことで成り立っていることから、そこで働いている交換の形態を分析することで人間の社会を論じようとする試みが、社会学や経済学、文化人類学といった研究分野では古くから行われてきた。考古学の研究においては、物質文化を扱うという学問的な性格から遺物の移動を取り上げた論考は古くから存在していたが、遺物が移動する様態（交換メカニズム）を分析して社会のあり方や物資流通のモデルを復元するような試みは、1960年代後半になって始めて本格的に開始されたといえよう（常木 1990）。

考古学研究の中で物資の流通を論じようとする時、通常は文化史的枠組みの中で経験主義的に遺物を取り上げた帰納的スタイルが主体である。原産地（生産地）の同定や遺物の型式学的類似性を頼りに、遠く離れた原産地（生産地）や遺跡どうしの政治的・経済的関係などを推測し、ときに遺物の流通モデルを立てようとするが、同じ遺物が出土する遺跡間に何らかの関係があったということは判明しても、交換のメカニズムは明示されない。また経験主義的に導かれた政治的・経済的関係や遺物の流通モデルを検証す

る明確な方法も準備されない。これに対して、遺物が移動するメカニズムに関する様々なモデルを演繹的に作り、実際の遺物の出土状況に分析を加えてそれがどのモデルに当てはまるかを決定することで、遺跡内や遺跡間、地域間などの物資の流通を論じようとする方法がある。帰納的な研究スタイルが離れた場所で同種の遺物が出土する事実の存在そのものをまず重視するのに対して、こちらは遺物の広がりや移動するメカニズムにある種の普遍性が存在するという前提に立ち、そこで働いていたメカニズムの内容と法則性の復元を目指す。なんのためにメカニズムを追究しようとするのかというと、物資の交換メカニズムに社会の統合形態が反映されていて、それを見ることで社会が複雑化する過程や社会システムの変遷が論じられると考えるからである。

西アジア考古学の中では帰納的スタイルで遺物の流通を論じる論考が一貫して隆盛を保っており、また特にウルク期以降の社会の分析に世界システム論の概念を援用した研究が近年盛んに論じられているが、演繹的モデルに基づき交換メカニズムを追究しようとした研究は90年代以降ほとんど見られなくなってしまった。このことは西アジア

考古学に限ったことではなく、1970～80年代にかけて、特にアメリカ考古学やヨーロッパ先史考古学の研究の中であれほど隆盛を誇った交換メカニズムに関する考古学的研究は激減し、資料の集積に基づいて個別的に物資流通のモデルを論じることが現在では主流となっている。そしてこの現象は、文化人類学の中で経済人類学が1980年代以降急速に力を失ってしまったことと明らかに対応していると思われる。もはや交換メカニズムの研究は社会を分析する力となりえないのであろうか？

本小稿ではまず、交換メカニズム研究の勃興とその衰退についての背景を簡単に振り返り、考古学研究、特に西アジア考古学研究の中で交換メカニズム研究が果たすこれらの可能性を考えてみたい。

経済人類学と考古学研究

1960～70年代にかけての経済人類学繁栄の基盤は、周知のように1940年代からのカール・ポランニーという一人の才能による一連の著作である。ポランニーは新古典派経済学が金科玉条のように考えていた近代ヨーロッパの市場経済の普遍性に異議を唱え、人間の社会にとって経済とは何かという根本的命題を投げかけた (Polanyi 1957; ポランニー 1975a)。彼の主張の論点は以下のようにまとめられよう。需要と供給という法則が全てを支配し、その中で人々は常に利潤を求めて行動するという市場経済の大原則は、産業革命以後の近代ヨーロッパ社会の中でのみ通用し、それ以外の社会では全く異なる原理の下に経済が運営されている。例えば、ある社会では名誉の獲得のために、またある社会では人間関係を潤滑にするために、さらにある社会では呪術から開放されるためにといったように、様々な目的でモノの取引、すなわち経済的行為が遂行される。経済は社会に「埋め込まれて」存在しているのであって、利潤の追求のみを目標とする市場経済は実は人類史の中ではきわめて特異・特殊な一形態に過ぎない。この主張を支える具体例として、ポランニーは様々な経済形態のあることを明示する文化人類学と歴史学に接近し、経済を軸として人類史の再構築を計った。ポランニーが社会の統合形態を見通すために用意した分類法は、社会内での財の移動に基づいた「互酬」「再分配」「(市場) 交換」という有名な3つの形態であった (Polanyi 1977; ポランニー 1975b, 1980)。ポランニーに提起された社会統合の3形態をさらに精緻化して様々な財の交換モデルを作り上げていったのが、新進化主義を担っていた文化人類学者のサーリンズである (Sahlins 1972; サーリンズ 1984)。

ポランニーやサーリンズの交換を視点とした社会統合形態は、前者はバビロニアや古代ギリシア、アフリカ近世などの経済史、後者は世界中の様々な民族誌に現われる社会

を事例として作り上げられているが、モデル化を推進する必要上各事例が時間や空間を超越していて、歴史叙述としての整合性はない。また当然のことながら、生産を視点として社会とその展開を考えるマルクス主義の研究者たちは、交換は生産から派生する契機の一つに過ぎないという激しい批判を浴びることになり (Rey 1973 ほか)、経済人類学者とマルクス主義人類学者の間で激しい論争が繰り広げられた。しかしながら1970～80年代、経済人類学の社会統合形態モデルは、特に未開社会の分析に大きな役割を果たせると考えられていた。

1960年代にギリシアと西アジアで先史時代の黒曜石交易の様態を追究し、交換メカニズムを考古学研究の俎上に始めて載せたコリン・レンフリュー (Cann et al. 1963; Cann and Refrew 1964; Renfrew et al. 1965, 1966, 1968; Dixon et al 1968) をはじめとする考古学者たちは、1970年代になってポランニーやサーリンズの社会統合形態モデルを考古学研究に本格的に取り込むことになる。その最も大きな理由は、経済人類学が提示した交換に基づく社会統合形態モデルが、それまでの歴史研究で長い間支配的であった生産手段を視点とするマルクス主義的唯物史観に取って代わる可能性を感じ取っていたからに違いない。レンフリューによる初期国家単位や初期文明、交換の類型化的提言 (Renfrew 1972, 1975) といったものの多くは、経済人類学の成果がそのベースにある。

そして1970～80年代、アメリカとイギリスの一部の考古学者たちは、前述したサーリンズの研究やウィルムセン編集による“Social Exchange and Interaction” (Wilmsen 1972) などの文化人類学的研究成果を受けて、先史時代の交換メカニズムの追究とモデル作りに熱を入れ上げた。ニューメキシコ大学から出版されたサブロフとランバーグ＝カーロヴスキ編集の“Ancient Civilization and Trade” (Sabloff and Lamberg-Karlovsky 1975)、アカデミックプレスのシリーズであるアールとエリクソン編集の“Exchange Systems in Prehistory” (Earle and Ericson 1977) と“Contexts for Prehistoric Exchange” (Ericson and Earle 1982)、ケンブリッジ大学から出版されたホーダーとオートンによる“Spacial Analysis in Archaeology”などにその情熱を見ることができよう。これらの著作の中には、遺跡から出土する遺物に統計的処理を加えて様々な図形パターンを導き、そこからどのような交換メカニズムが復元できるか、また交換メカニズムのどのような形態に遺物の図形パターンが最も当てはまるのかという議論が満載されている。ほとんどの場合分析の中心となっているのは、原産地や中心となっている集落での遺物量と、そこから離れるに従って各遺跡で出土する遺物量との比較を行って減少カーブを作り、そのパターンから交換メカニズムの形態を

読み取ろうという回帰分析の手法である。減少カーブ作りはどんどん複雑化し、遺物量の等高線地図＝シナグラフィックマップまでつくられるようになる。そして様々なパターンから、直接的な互酬交換が行われていたとか、互酬連鎖的交換が働いていたとか、中心地再分配が機能していたとか、遺物移動の手段が陸上交通から海上交通に変化した、などと議論された。

文化人類学の変容

考古学研究における交換メカニズム研究の理論的支柱であった経済人類学を含めて、1980年代の特に後半以降の文化人類学は大きく変容していく。社会主义諸国の連続的崩壊や冷戦構造の終焉、情報・物資のグローバリゼーションという名のもとに西欧的商業資本が世界の隅々まで浸透していく過程を目の当たりにし、文化人類学が研究の対象としてきた「未開社会」の形成にも実は近代ヨーロッパ資本主義社会が深く関わっていたのではないかという懐疑の念が、研究者たちの間で現実味を帯びて議論され始めたのである。文化人類学がおよそ100年にもわたって積み上げてきた民族誌が再検討され、そこで描かれた「未開社会」の様々な伝統的習慣や文化の形成に西欧近代文明が関与していたことが次々に明るみに出る。その最も象徴的な事例は、文化人類学者によって「伝統的社会」の社会維持機構の最も不可思議で魅力的な例の一つとして信じられていた北米クワキウトル・インディアン（クワクワカワク）の行う饗宴と贈与の競争であるポトラッチが、実はヨーロッパ商人との毛皮貿易による利益によって増幅された習慣であり、19世紀末から描かれてきたクワキウトルの社会像はヨーロッパ資本主義社会に組み込まれて初めて生じた社会を表象していた可能性が示唆されたことであろう（Codere 1950；春日 1995；立川 1999）。これと同じ脈絡の中で狩猟採集民研究では伝統主義と修正主義の間で深刻なカラハリ論争がおこっている。“Man the Hunter”（Lee and DeVore 1968）に代表される、狩猟採集民社会が自己完結的に伝統的社会を長期にわたって維持してきたと考える伝統主義者 traditionalist に対して、現在の狩猟採集民社会は文明社会によって周辺に追い立てられ文明社会との接触によってヨーロッパ近代以降に成立した極めて新しい現象であると修正主義者 revisionist たちは説いた（Wilmsen and Denbow 1990）。後者の立場では、例えば伝統主義者により表象された狩猟採集民像の代表選手とも言えるカラハリ・ブッシュマンが、かつてアフリカ東海岸の交易集団との交流によってインド洋交易の末端に連なっていて、大航海時代以降にこの交易ネットワークが断ち切られてから徐々に現在のような「自立的」生活をおくるようになったというように語られる（小川 2000）。また、経済史を中心とした歴史

学の分野で興隆してきた世界システム論でウォーラースteinは、ヨーロッパ資本主義の発達と展開に当たって、非資本主義社会（非西欧社会）の存在と西欧社会との相互関係の重要性を論じ（ウォーラースtein 1981, 1985）、一見して西欧社会と全く関係ないように見える世界各地の非西欧社会の経済や社会機構が、実はヨーロッパ資本主義の発展と深い関わりがあり世界システムを形成していたことを主張するのである。

長い間文化人類学の研究対象であった伝統的な「未開社会」が、実は近代ヨーロッパ資本主義が膨張していく過程で生み出されたものである可能性。否そこまで極論しなくとも、少なくとも近代ヨーロッパ資本主義との接触が「未開社会」形成に関わっていたことが議論されるようになつた研究状況の中で、研究対象を失う危機に陥った文化人類学は、文化人類学が「未開社会」の研究を行ない社会学が「ヨーロッパ型近代社会」の研究を行うというそれまでの研究上の住み分けをかなぐり捨てて、現代社会の特に発展途上国を扱う社会学とでもいえるような研究をも志向し始めていく。貧困や開発、ジェンダー、民族紛争や宗教運動などといった1990年代以降の文化人類学の主要テーマ自体が、こうした事情を如実に物語る。文化人類学者が作ってきた民族誌の中の真実とは何か、誰が何のために調査を行うのか、文化人類学が目指しているものは何かなど、混沌とした学問的状況の中で、文化人類学者たちの反省と模索が続く。

さて、文化人類学者たちが描いてきた「未開社会」の様々な習慣や伝統のレトリックが白日の下にされされると同時に、それらを下敷きに想起された交換メカニズムに基づく社会統合形態モデルに対する信頼性が急激に薄らいでしまったことも無理からぬことであった。経済人類学における社会統合形態の詳細化や実在論者と形式論者の議論が1980年代以降急速に拡散してしまったのは、社会に「埋め込まれた」と信じられていた経済が資本主義経済との接触で形成されていたという逆説と、進行する現実の世界の方がはるかに切迫し、搖れ動き、危うさを増したにもかかわらず、経済人類学がその解決に何の手立ても提示できなかつたからである（松田 1995）。現実の社会の方が、交換メカニズムに基づく社会統合形態モデルで描き出す社会よりもはるかに複雑で、モデルが陳腐化してしまったのである。

追従する考古学

前述したように、1970～80年代にかけて、アメリカとイギリスの一部の考古学者たちは遺物を様々に操作しながら交換メカニズムの復元とモデル作りに励んでいた。かくいう筆者も、そうした手法によるモデル作りによって先史時

代社会に行われていた交換の実態とその変遷から社会の進化が読み取れるものと考えて、当時夢中になってこれらの論文を読み漁り後にそうした研究状況を紹介したこともある（常木 1990, 1991）。ただし、その基本的理念には共感しつつも、減少カーヴ作りに当たっての無数の前提と、そのようにして作った図形パターンから交換メカニズムを導くのにあまりに楽観的であることに大きな危惧は抱いていた。特に交換メカニズムの研究に理論的な枠組みを提供したレンフリューの一連の論文については、演繹的な交換メカニズムの諸類型（レンフリューの言葉では交換モード）と様々な減少カーブとの対応関係の提示は行われているものの、モデルの考古学化にはとても成功したとは言えない、つまり実際の考古学データに当てはまらないと総括している（常木 1991:185）。そして、現実の社会の方が交換メカニズムで描き出せる社会よりもはるかに複雑で経済人類学のモデルが陳腐化してしまったように、この考古学で描こうとした先史時代の交換メカニズムが、はるかに複雑な当時の現実世界を十分に表せていないことだけはいまや確かなるようである。

さすがに1990年代に入ると、考古学の研究者は文化人類学をはじめとする関連諸学のパラダイム・シフトに気づいて、またそれに追従することになる。考古学の研究状況の一部は文化人類学の生き残り策をそのまま追従し、社会学や文化人類学の最近の主要テーマを冠した、例えばジェンダー考古学（Gero and Conkey 1991ほか）などといった研究書が跋扈している。西アジア考古学の中でも同様に、流行の研究主題が論じられる機会が増えている（例えばウルク研究に世界システム論を取り入れた Algaze 1993 やメソポタミア文明の形成に当たってフェミニズムを論じた Pollock 2000など）。

交換や交易、物資流通などを論じる場面では、あれほど交換メカニズムの研究に熱を上げていた考古学者たちも、減少カーブ作りや交換モデルの復元という作業から離れていた。例えば交換メカニズム研究を推進した指導的研究者一人であったアルは、交換研究のそもそもの目的であった社会の複雑化の過程や社会システムの変遷を、集落パターンや威信財の分析など多様な視点を交えながら論じていく研究姿勢をとるようになる（Earle 1991, 1997）。そこでは長距離交易モデルなども論じられるが、それはあくまで社会の複雑化を説明する多様な視点の一つに過ぎず、交換のメカニズムやそこから導ける社会統合形態のモデルをことさらに取り上げることもなくなった。レンフリューはといえば、周知のようにインド・ヨーロッパ語族の起源と拡散の問題に研究の焦点を既に移していく（Renfrew 1987；レンフリュー 1993）、交換メカニズムについてかつて提出した自らのモデルを実際の考古学データで語ること

は今まで行っていない。

ここまで問題点を次のようにまとめておこう。第1に、主として経済人類学が提起した財の移動パターンに基づく社会統合形態モデルを応用して先史時代の交換メカニズムに関するモデルが作られたが、前者に対する信頼性が薄れるとともに後者への信憑性も薄れてしまったこと。第2に、先史時代の実際の遺物の分析に基づいて交換メカニズムの諸類型を復元するための方法論が不備で、また両者の間に様々な変数が存在している。従って遺物を扱う研究上の実際と演繹的なモデルとの乖離が甚だしいこと。

新たな交換メカニズム研究に向けて

交換メカニズムの研究とは、ありていに言えば、誰が、なぜ、どのように物資や情報を移動したのかを探究することであり、考古学研究の中では物質文化の分析を通じてこのような問い合わせようすることなのだが、どうやらそのための方法論やメカニズムの類型化はいまだ確立していないのが現状のようである。そもそも現在疑われているのは、交換という視点が社会を表象するのかという根本的命題であり、かつて信じられたような互酬→再分配→市場交換というような進化論的メカニズムの類型化は、単純すぎて現実の歴史展開を説明していることにもはやなりそうもない。

前節の最後でまとめた第1の問題点は、経済人類学の盛衰をそのまま考古学研究が追従してしまったことに主に起因する。基本的に現代社会の理解を目的に近現代社会の資料を用いて研究を行っている社会学や文化人類学のパラダイムやモデルを追従している限り、考古学は常にカラハリ論争における伝統主義者としての立場に立たざるを得なくなる。この点はプロセス学派であろうとコンテクスト学派であろうといかなる立場であろうと同様である。例えば農耕の開始や文字の始まりといった問題を扱うとしよう。狩猟採集民が農耕民化するプロセスや文字を持たなかつた人々が文字を持つようになったプロセスを民族誌からモデル化したとき、政治的に押し付けられるモデルや環境変化に対応するモデルなど様々な類型を導き出すことが出来るだろう。しかしそれは全てのケースで二次的に適応したモデルであって、農耕や文字の出現モデルそのものとはなりえない。また、もともとコンテクストが大きく異なることもあります。考古学研究においてそのようなモデルは二次的適応のモデルとして参考になる可能性はあるが、西アジア考古学のように常に始まりが問題となるようなところでは難しい。近現代モデルの先史時代への投影 자체が修正主義に批判されているように、社会学や文化人類学のパラダイムやモデルを考古学に投影すること自体が批判されなければならない。交換メカニズムの追究に関して

も、今私たち考古学の研究者がやらなければならないことは、物質文化資料自体から考古学的なパラダイムとモデルの形成を、困難であろうとも模索することだと思われる。

第2点である先史時代の交換メカニズム復元に関する方法論上の問題では、減少カーブなど数量化によるモデル構築が批判されているのであり、交換メカニズム研究そのものの必要性が否定されているのではない。物資流通に関わるこれまでの数理的モデルは、物質文化研究の重要な局面である技術や使用の様態を常に捨象してしまってきた。つまり、物資の流れ全体から流通部分のみを切り離して分析してきたわけである。交易全体から見れば、流通は物資の生産と消費・廃棄の間を繋ぐ一部分に過ぎず(Knapp 1993)、当然ながら流通は生産の形態や消費の動向と密接に関連しそれに左右されてきた。従って、交換メカニズム研究の視点には生産や消費のありようも含めてはじめて、社会全体を見通す鍵を提供できるだろう。その意味で、例えば西アジア先史時代の交易を考える際の代表的素材でありつづけている黒曜石研究の焦点が、原産地域における原材料の獲得と石器素材の作られ方に向いていること(Balkan et al. 1997, 1998)などは好ましい方向性を示すものといえよう。

交易メカニズムを表象するのは遺物の分布と出土量から抽出した数理的モデルなのではなく、生産、流通、消費という物資の流れ全体に関わるそれぞれの部分の資料を丁寧にすくい上げて関連づける作業であると筆者は考えている。西アジア考古学の中では幸い、これらの各部分についての沢山の資料が蓄積されてきており、また印章や封泥、粘土板といった生産・流通・消費を直接表示する資料すら存在していて、交易メカニズムを蓋然性をもって復元できる可能性は大きい。

最後に、繰り返しとなるが喚起しておきたいのは、交換メカニズム研究の目的は社会の複雑化の過程や社会システムの変遷を語るためである。人類の歴史が、身近な資源にほとんど平等的にアクセスしていた小さな集団から、徐々に専業性を高めて分業化したより大きな集団へと変化していく過程とするならば、社会内や社会間で果たしていた物資・情報交換の役割は飛躍的に増大していったはずである。その過程で、交換の中心を担う人物が登場・交代し、交換が恒常化・体系化され、物資を輸送する手段や方法も変化していったのであって、交換メカニズムの追究は、生産専業化の研究(西秋 2000)などと同様に、社会複雑化の過程を追究するためのきわめて重要な戦略となるはずである。従って、交換メカニズムに関する明確で柔軟性に富んだモデルが提示され、それを表す考古学的手法が開発できれば、この戦略は十分機能すると信じられる。

本小論の執筆に際し、文化人類学の現在の状況について同僚の風間計博さんより多くのことを教えていただいた。感謝申し上げるとともに十分にそれを生かせなかつたことをお詫びしたい。

参考文献

- Algaze, G. 1993 *The Uruk World System: The Dynamics of Expansion of Early Mesopotamian Civilization*. Chicago, University of Chicago Press.
- Balkan N. et al. 1997 Rapport sur l'obsidienne Cappadocienne et sa diffusion : campagne 1996. *Anatolia Antiqua Eski Anadolu* 5: 263-274.
- Balkan N., D. Binder and M.-C. Cauvin 1998 Exploitation de l'obsidienne de Cappadoce : première campagne fouille à Kuletepe (Komurcn). *Anatolia Antiqua* 6: 301-315.
- Cann, J.R. and C. Renfrew 1964 The Characterization of Obsidian and It's Application to the Mediterranean Region. *Proceedings of the Prehistoric Society* 30: 111-133.
- Cann, J. R., J. E. Dixon and C. Renfrew 1963 Obsidian Analysis and the Obsidian Trade. In D. Brothwell and E. S. Higgs (eds.), *Science in Archaeology*, 578-591. Bristol, Thames and Hudson.
- Cauvin, M.-C. and N. Balkan 1996 Rapport sur les recherches sur l'obsidienne en Cappadoce, 1993-1995. In C. Reynal and A. Tibet (eds.), *Anatolia Antiqua Eski Anadolu* 4: 249-271.
- Codere, H. 1950 *Fighting with Property: A Study of Kwakiutl Potlatching and Warfare, 1872-1939*. Monographs of the American Ethnological Society 28.
- Dixon, J. E., J. R. Cann and C. Renfrew 1968 Obsidian and the Origins of Trade. *Scientific American* 218: 38-46.
- Earle, T. K. (ed.) 1991 *Chiefdoms: Power, Economy, and Ideology*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Earle, T. K. (ed.) 1997 *How Chiefs Come to Power?* Stanford, Stanford University Press.
- Earle, T. K and J. E. Ericson (eds.) 1977 *Exchange Systems in Prehistory*. New York, Academic Press.
- Ericson, J. E. and T. K. Earle (eds.) 1982 *Contexts for Prehistoric Exchange*. New York, Academic Press.
- Gero, J. M. and M. A. Conkey (eds.) 1991 *Engendering Archaeology: Women and Prehistory*. Oxford, Blackwell.
- Hodder, I. and C. Orton 1976 *Spacial Analysis in Archaeology*. Cambridge, Cambridge University Press (深沢百合子訳 1987『考古学における空間分析』富士インターナショナルプレス).
- Knapp, A. B. 1993 Thalassocracies in Bronze Age Eastern Mediterranean Trade: Making and Breaking a Myth. *World Archaeology* 24/3: 332-360.
- Lee, R. B. and I. DeVore (eds.) 1968 *Man the Hunter*. Chicago, Aldine.
- Polanyi, K. 1957 *The Great Transformation*. New York, Beacon Press (吉沢秀成ほか訳 1975a 『大転換—市場社会の形成と崩壊』東洋経済新報社).
- Polanyi, K. 1977 *The Livelhood of Man*. New York, Academic Press (玉野井芳郎ほか訳 1980 『人間の経済』I, II 岩波現代選書).
- Pollock, S. 2000 *Ancient Mesopotamia*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Renfrew, C. 1972 *Emergence of Civilization: The Cyclades and the Aegean in the Third Millennium* B. C. London, Methuen.
- Renfrew, C. 1975 Trade as Action at a Distance: Questions of

- Integration and Communication. In Sabloff and Lamberg-Karlovsky 1975, 3-59.
- Renfrew, C. 1987 *Archaeology and Language : The Puzzle of Indo-European Origins* (橋本横矩訳 1993 『ことばの考古学』青土社).
- Renfrew, C., J. R. Cann and J. E. Dixon 1965 Obsidian in the Aegean. *Annual of the British School of Archaeology at Athens* 60 : 225-247.
- Renfrew, C., J. E. Dixon and J.R. Cann 1966 Obsidian and Early Cultural Contact in the Near East. *Proceedings of the Prehistoric Society* 32/2 : 30-70.
- Renfrew, C., J. R. Cann and J. E. Dixon 1968 Futher Analysis of Near Easter Obsidians. *Proceedings of the Prehistoric Society* 34 : 319 -331.
- Rey, P-P. 1973 *Les alliances de classes*, Maspero.
- Sabloff, J. A. and C. C. Lamberg-Karlovsky (eds.) 1975 *Ancient Civilization and Trade*. Albuquerque, University of New Mexico Press.
- Sahlins, M. 1972 *Stone Age Economics*. Chicago, Aldine Publishing Co. (山内 駿訳 1984 『石器時代の経済学』法政大学出版局).
- ウォーラースtein, I. (川北稔訳) 1981 『近代世界システム』1, 2 岩波書店。
- ウォーラースtein, I. (川北稔訳) 1985 『史的システムとしての資本主義』岩波書店。
- Wilmsen, E. N. (ed.) 1972 *Social Exchange and Interaction*. University of Michigan Museum of Anthropology, Anthropological Papers 46. Ann Arbor, University of Michigan.
- Wilmsen, E. N. and J. Denbow 1990 Pavadiamic History of Sun-speaking Peoples and Current Attempts at Revision. *Current Anthropology* 31 : 489-524.
- 小川英文 2000 「狩猟採集社会と農耕社会の交流：相互関係の視角」小川英文編『交流の考古学』266-295頁 朝倉書店。
- 春日直樹 1995 「経済—世界システムの中の文化」米山俊直編『現代人類学を学ぶ人のために』100-118頁 世界思想社。
- 立川陽仁 1999 「ポトラッチ研究史と将来の展望」『社会人類学年報』25号 167-185。
- 常木 晃 1991 「考古学における交換研究のための覚書(1)」『東海大学校地内遺跡調査団報告』1 191-201頁。
- 常木 晃 1991 「考古学における交換研究のための覚書(2)」『東海大学校地内遺跡調査団報告』2 178-191頁。
- 西秋良宏 2000 「工芸の専業化と社会の複雑化-西アジア古代都市出現期の土器生産」『西アジア考古学』1号 1-9頁。
- 松田 凡 1995 「経済—形式—実在論争とモラル・エコノミー論争」米山俊直編『現代人類学を学ぶ人のために』35-54頁 世界思想社。
- ボランニー, K. (玉野井芳郎ほか訳) 1975b 『経済の文明史』日本経済新聞社。

常木 晃
筑波大学歴史・人類学系
Akira TSUNEKI
*Institute of History and Anthropology,
University of Tsukuba*